

欧米の伝承歌遊び

Traditional Singing Games of European and American Children

今 井 民 子*

Tamiko IMAI

論文要旨

わらべうた、即ち伝承の歌遊びは、古くはフレーベル、今世紀のオルフ、コーダイ、また日本では小泉文夫により音楽教育に活用されてきた。わらべうたはどの民族にも存在するが、外国のものについてはわずかな紹介があるにすぎない。今後は、世界的規模でわらべうたを考える必要があろう。本稿では、欧米の歌遊びの中でも中心的な鬼遊びをとりあげ検討した。この遊びは、特定の隊形と充実した歌詞を持ち、民族性を最も強く反映している。日本と欧米の鬼遊びの大きな相違は、欧米に顕著な恋愛、結婚のゲームが日本には全く見られないことである。これは、双方の恋愛や結婚に対する意識の相違に起因するものである。

はじめに

わらべうた、即ち伝承の歌遊びは、幾世代にもわたって受け継がれ、常に子どもの心をとらえてきた。歌と遊びが不思議に融合したこの歌遊びの教育的効果に着目し、教育の場に活用したのがフレーベルである。今世紀に入り、オルフ、コダーイは、わらべうたを素材とする音楽教育のシステムを確立した。日本では、小泉文夫による「わらべうたを出発点とする音楽教育」の提唱を契機に、わらべうたの音楽教育における重要性がはじめて認識されるようになった。

わらべうたはどの民族にも存在する。日本のわらべうたについては、小泉（1969）、尾原（1972、1975）などによる系統的研究がみられるが、外国のものについては、後藤田（1975、1981、1976）によるわずかな紹介があるにすぎない。今後は、日本を含む世界的規模でわらべうたを考える必要があろう。本稿では、欧米の歌遊びの中でも中心的な鬼遊びをとりあげ検討した。この遊びは、特定の隊形と充実した歌詞をもち、民族性を最も強く反映している。資料としては、欧米の伝承遊びの古典的文献として知られる A.B.Gomme（1894、1898）と W.W. Newell（1883）の研究、その後の P.G.Brewster（1976）による総合的研究、及び E.Fowke（1969）による歌遊びの代表的実践書などを参照した。

1. 鬼遊びの分類

ゴムは子どもの遊びを(1)劇的遊び（dramatic games）と(2)技と偶然の遊び（games of skill and chance）とに大別する（1989、P.460）。(2)が一定のルールに従って勝敗を競うものであるのに対し、(1)は歌、台詞、所作を伴う一種の劇遊びである。一般的に(1)は女子、(2)は男子の遊びとされる。今回とりあげる鬼遊びは、ゴムのいう劇的遊びに該当する。「鬼遊び」の用語は、

* 弘前大学教育学部音楽科教室

Department of Music, Faculty of Education, Hirosaki University

日本では文字どおりタブー視された鬼を意味するが、欧米ではパートナーの選択者という積極的役割をもつので、むしろ「隊形遊び」とする方が適切かもしれないが、本稿では「鬼遊び」を用いた。

では鬼遊びはどのように分類されるか。ゴムは、鬼遊びがいくつかの隊形をもつことに着目し、隊形による分類を試みている(1898, p.475)。即ち①列形、②円形、③特別の隊形をもたない対話形式のもの、④アーチ形、⑤巻き上げ形の5つである。(なお、フォークも円形、橋形、列形、及び各種の組み合わせの4種に分類している)。

①の列形は、ほぼ同数の二列横隊が向かいあって交互に前進、後退をくり返すもので、歌詞も整然とした問答形式をもつものが多い。②の全員が手をつないで輪になって廻る円形は、鬼遊びの中で最も数多くみられる。③に属するものは、子ども達をねらう鬼とそれを守る母親との間に展開する鬼遊びである。ゴムはこの遊びに特定の隊形を設定していないが、遊び方は日本の「ことろ鬼」に類似するもので、むしろ一列形というべきであろう。

④のアーチ形は、2人が手を高くかざし、その下を残りのものが通り抜けるもの、⑤の巻き上げ形は、横の長い列の端のものを中心に、他の端から蛇のとぐろのように巻き上げていき、また逆にほどこいていく遊びである。次にこれらの5つのタイプの各々について、詳しく検討してみよう。

2. 列形

2組のグループのかけあいの特徴とする列遊びは、内容により①両グループの戦闘、②求愛、結婚、③追いかけて鬼の前座の3つに分かれる。

①はいわば戦闘(恐らく取組み合い)を前にした両軍の儀式である。〈We are the Robbers〉(ゴム, 1898, p.343, ニューウェル, p.248 〈Have you any Bread and Wine?〉)では、ほぼ同数の2列が交互に前進、後退をくり返しながら、遂に名乗りあい、「用意はいいか」で戦いが始まる。2つのグループは侵略者と防衛者、あるいはローマ人とイギリス人などの対抗する名をもち、一方が他方に様々な要求をつきつけるが、敵はこれを拒絶して威嚇する。敵には銃を打ったり、拳をふりあげるジェスチャーを伴うこの遊びは、戦いの前ぶれの緊張を高める勇ましくも楽しいものである。

②の求愛、結婚のゲームは、欧米の歌遊びの主流を占めるもので、むしろ次に述べる円形に多いが、列形にもいくつかの例がある。〈Nuts in May〉(ゴム, 1894, p.424, ニューウェル, p.89, p.236, ブルースター, p.109)は、最もポピュラーな歌遊びの一つである(歌詞1, 楽譜1参照)。問答形式で双方の列から選ばれた男女のカップルが引張り合いをして、負ければ相手方に移り、片方の側が全員いなくなるまで続けられる。この遊びは五月祭(May Day)に行われる結婚行事に因んだものとされる。この日、摘み集められる習慣となっているサンザシの花(May)は、若者によって選ばれる花嫁の象徴である。「Nuts in May」は「Knots of May」(サンザシの花束)の訛ったもので、「Nuts in Mayとして誰さんを集めにきた」という歌詞は、明らかに女性への求愛を意味する。選ばれたカップルの引張り合いは、最も原始的な略奪婚のなごりとされる(ゴム, 1894, p.424)。

歌詞1 〈Nuts in May〉

Here we come gathering nuts in May,

Nuts in May, nuts in May,
Here we come gathering nuts in May,
This cold frosty morning.

Who will you have for your nuts in May,
Nuts in May, nuts in May?
Who will you have for your nuts in May,
This cold frosty morning?

We will have __ for our nuts in May,
Nuts in May, nuts in May,
We will have __ for our nuts in May,
This cold frosty morning.

Who will you have to pull her away,
Pull her away, pull her away?
Who will you have to pull her away,
This cold frosty morning?

We will have __ to pull her away,
Pull her away, pull her away,
We will have __ to pull her away,
This cold frosty morning.

楽譜 1



次の〈Three Dukes〉〈Three Sailors〉〈Three Knights from Spain〉では、一方は求婚する男性側（普通は3人の少年）、他方は申し込まれる女性側（普通全員少女）と双方の関係は明確になり、3人対多数の列形でゲームが行われる。〈Three Dukes〉（ゴム、1898、p.233、ニューウェル、p.47 〈Here comes a Duke〉、ブルースター、p.89）は、馬を駆って嫁選びにやってきた3人の男性が、パートナーを選ぶもの。女性側に色々難しくせをつけて品定めをする花婿と、怒ってやり返す娘達のやりとりがユーモラスである。男性側は次第に数を増し、全員が花婿側に移るまで続けられる。〈Three Sailors〉（ゴム、1898、p.286、ニューウェル、p.46、p.234 〈Three Kings〉、ブルースター、p.99 〈Three Baker's〉）では、娘の母親が新たに登場する。彼女は、様々な職業を名乗って一夜の宿を乞う（同族の一員となることを意味する）3人の求婚者を厳しく吟味するが、遂に彼らが「3人の王」を名乗るに及んで、結婚の承諾を与え、寝ている娘を起こし持参金をつけて送り出す。ところが求婚者は王を装う追いはぎで、娘の財産を奪って母親に捕えられる。3人の王のうち最初につかまったものが次の母親

役となる。結末の盗賊ごっこは、本来の求婚ゲームとは無関係にあとからつけ加えられたものと考えられる。〈Three Knights from Spain〉(ゴム, 1898, P.257, ニューウェル, P.39) は、ヨーロッパ各国に広く伝わる遊びである。ここでは、娘の母親と求婚者の間で昔の取引婚を思わせる売買の交渉が行われる(歌詞2参照)。

歌詞2 〈Three Knights from Spain〉

Here come two dukes all out of Spain,
A courting to your daughter Jane.

My daughter Jane, she is so young,
She can't abide your flattering tongue.

Let her be young, or let her be old,
It is the price, she must be sold,
Either for silver or for gold.
So fare you well, my lady gay,
For I must turn another way.

Turn back, turn back, you Spanish knight,
And rub your spurs till they be bright.

My spurs they are of a costliest wrought,
And in this town they were not bought,
Nor in this town they won't be sold,
Neither for silver, nor for gold.
So fare you well, my lady gay,
For I must turn another way.

Through the kitchen, and through the hall,
And take the fairest of them all;
The fairest is, as I can see,
Pretty Jane — come here to me.

Now I've got my pretty fair maid,
Now I've got my pretty fair maid,
To dance along with me,
To dance along with me !

〈Three Sailors〉や〈Three Knights from Spain〉は異族間の契約婚のなごりとされる(ゴム, 1898, P.257)。これは、先の原始的略奪婚から真の結婚への過渡的な結婚形態であり、求婚者に対して厳しい条件を求めるいわば族長役の母親と持参金つきの娘の設定は、嫁買い婚の性格をよくあらわしている。

最後に③追いかけ鬼の前座としての列遊びについて述べる。〈Jenny Jones〉(ゴム, 1894, P.260, ニューウェル, P.63 〈Miss Jennia Jones〉, ブルースター, P.45) は、娘ジェニーが意地悪な母親によって求婚者を妨害され、酷使された末に死ぬという不幸な物語である。前半の求婚ゲームの後、娘の霊による追いかけ鬼に発展する。ジェニーと母親の2人が少し離れ

て立ち、残りのものが横隊の列で前進、後退する。母親は再三訪れる求婚者に、娘は家の仕事で忙しいと口実をつけて会わせようとしない。遂に娘は病死し、皆によって埋葬される。ここで列は隊形をとき、立ち上ったジェニーの霊が他のものを追いかけて、最初につかまったものが次のジェニー役になる。埋葬の場面もかなり演劇化され、遺骨をおおう布の色についての問答は興味深い。

〈Milking Pails〉(ゴム, 1894, P.376, ニューウェル, P.166) は、追いかけて鬼の前座としてより一層強い効果をもっている(歌詞3参照)。鬼役の母親一人と追われる側の娘達が交互に前進、後退しながら問答する。内容は、牛乳おけを買うための方策を問答してゆくと、結局母親に不都合な事態となるので、怒った母親が娘達を追いかけるというものである。しりとり形式の問答は、その後の追いかけて鬼に向けて緊迫感を盛り上げてゆく。なお、最初につかまったものが次の母親役となる。

歌詞3 〈Milking Pails〉

Will you buy me a pair of milking-pails,
Oh, mother! Oh, mother?
Will you buy me a pair of milking-pails,
Oh, gentle mother of mine?

Where is the money to come from,
Oh, daughter! Oh, daughter?
Where is the money to come from,
Oh, gentle daughter of mine?

Sequence: Sell my father's feather bed
Where shall your father sleep?
Sleep in the servant's bed.
Where shall the servant sleep?
Sleep in the stable.
Where shall the pigs sleep?
In the wash-tub.
Where shall we wash the clothes?
Wash them in the river.
What if they should swim away?
You can jump in and go after them.

以上は列遊びの代表的なものだが、互いに向き合った2つのグループの前進、後退の動きと問答形式の歌詞は、この遊びに一定の規則的リズムと次第に高まる緊張感を与えている。

3. 円形

円形は欧米の鬼遊びの大半を占める。ゴムはこれを、①特定の役柄は存在せず、全員が同じ動作をするもの、②円中央の一人がサークルの中から相手を選ぶもの、③円はクロスのように静止して語り手の役割を担い、二、三の特定の人物だけが動くものの3つに分類している。以下、各々について述べる。

①は様々な人間生活を模倣、再現したものが多い。〈Oats and Beans and Barley〉(ゴム,

1898, P. 1, ニューウェル, P. 80 <Oats, Peas, Beans, and Baley grows>, ブルースター, P. 87) は, 作物の種播きから収穫までを再現するもので, 元来豊穰の祈願をこめた宗教的儀式とされ, ヨーロッパ各国に広くみられる。「作物はどうやって育つのか誰も知らない」と歌って回転をくり返す間に, 農耕の様々な所作が行われる。特に拍手や足踏みの動作は, 地の神に対する信仰をあらわしたものとされる。ゲーム最後のパートナー選びは, 豊穰に関連する結婚を意味している。

<Mulberry Bush> (ゴム, 1894, P. 405, ニューウェル, P. 86 <As we go round the Mulberry Bush>, ブルースター, P. 85) は, 日常生活の様子を細かく再現したもので, <Nuts in May> と並んで子ども達に最も親しまれている遊びである (歌詞 4 参照, 旋律は楽譜 1 と同じものが多い)。「クワの林を廻って」とくり返し歌いながら廻る間に, 曜日毎に主婦の家事や子どもの朝の身仕度, 登校, 下校などの動作が盛り込まれる。

歌詞 4 <Mulberry Bush>

As we go round the mulberry bush,
The mulberry bush, the mulberry bush,
As we go round the murberry bush
So early in the morning.

This is the way we wash our clothes, &c.
All of a Monday morning.

This is the way we iron our clothes, &c.
All of a Tuesday morning.

This is the way we scrub our floor, &c.
All of a Wednesday morning.

This is the way we mend our clothes, &c.
All of a Thursday morning.

This is the way we sweep our house, &c.
All of a Friday morning.

This is the way we bake our bread, &c.
All of a Saturday morning.

This is the way we go to church, &c.
All of a Sunday morning.

<When I was a Young Girl> (ゴム, 1898, P. 362, ニューウェル, P. 88 <When I was a Shoemaker>, ブルースター, P. 86) では, 主に職業がジェスチャー化される。フランスの<アヴィニョンの橋>と同種のもので, 様々な職業の人物が登場し, その動作を行う。イギリスのものは, 女学生が結婚し, 寡婦になるまでの女の一生を扱っている。

また <Green Gravel> (ゴム, 1894, P. 171, ニューウェル, P. 71, ブルースター, P. 56)

は、少女の埋葬の儀式を思わせる歌詞から、葬いに囚んだものとされる。ある少女のもとに恋人の死を知らせる使者が訪れる内容で、全員で輪になって廻る最後に、「誰さん、ふり返れ」と名前を呼ばれたものが一人だけ外側を向き、ゲームは全員が後ろ向きになるまで続く。

〈Lubin〉(ゴム, 1894, P.353, ニューウェル, P.131 〈Right Elbow in〉, ブルースター, P.156 〈Looby Loo〉) は、特定のストーリーをもたない単純な動作遊びである(歌詞5 参照)。はじめ輪になって踊った後、その場で様々な動作をする。それは、体のある部分(例えば肘)を前に突き出し、ひっ込め、揺り動かしてくるっと一回転するもので、この動きは体の他の部位に及び、左右別々に行われる。前の動作を順に累加していくやり方もあり、一種の反射神経と記憶力が要求される。

歌詞5 〈Lubin〉

Here we go, Looby Lou;
Here we go, Looby Lou;
Here we go, Looby Lou;
All on a Saturday night.

I put my right foot in;
I put my right foot in;
I give my right foot a shake, shake, shake,
And turn myself about.

Sequence: left foot, right hand, left hand, whole self. &c.

その他、円形遊びには歌詞は単純だが遊戯としての面白さをもつものがいくつかある。〈Ring a Ring o' Roses〉(ゴム, 1898, P.108, ニューウェル, P.127 〈Ring around the Rosie (Rosy)〉, ブルースター, P.150) は、比較的小さな子ども達の遊びで、「ばらの廻りを廻れ」と歌って廻った後、突然すわりこむものである。小さな子どもには、この動きの変化そのものが十分魅力的なのである。すわりおくれたものが罰として円の中央に入るやり方もある。〈Sally go round the Moon〉(ゴム, 1898, P.149) は、単純な回転遊びだが、歌が終わるたびに回転の方向が変わる面白さがある。また、サークルのメンバーが円の外側と内側に向きを違えて回転するものには、先の〈Green Gravel〉の他に〈Wall flowers〉(ゴム, 1898, P.329) がある。

〈Farmer in the Den〉(ゴム, 1898, P.420, ニューウェル, P.129 〈Farmer in the Dell〉, ブルースター, P.146) は、円の中央にいる農夫がサークルの中から妻を選び、その妻は次に子どもを選ぶという具合に、順に一人ずつ選ばれるもの(歌詞6, 楽譜2 参照)。最後に残ったものは、骨やチーズとからかわれ、次の農夫となるが、この遊びには順に選び選ばれる楽しさがある。

歌詞6 〈The Farmer in the Den〉

The farmer in the dell,
The farmer in the dell,
Heigh ho! fo Rowley O!
The farmer in the dell.

の物語。はじめのサークルダンスですわりおくれたものがカップルの一方となり、別のメンバーを通して恋人の名を発表してもらう。続いてカップルを祝福する後半のサークルダンスが行われる。

円形遊びの最後のクロス型は、サークルはその場で歌を歌い、特定のものだけが動くものである。〈Old Roger〉(ゴム, 1898, P.16, ニューウェル, P.100 〈Old Grimes〉, ブルースター, P.46 〈Old Orony〉) は、埋葬されたロジャーの墓に一本のりんごの木が生え、その実を盗みにきた老婆がロジャーの霊に追いかけられるという内容。円の中央にロジャーが横たわり、りんごの木はロジャーの頭のところに立ち、実の落下をあらわすゼスチャーをする。そこへ老婆が進み出て実を拾い集めると、ロジャーが起き上り、片足跳びで逃げる老婆を円外に追い出す。りんごの木は死者の象徴で、墓の冒瀆者を戒めたものとされる。

〈Round and Round the Village〉(ゴム, 1898, P.122, ニューウェル, P.128, P.229 〈Go round and round the vally〉 〈Walking on the Levy〉, ブルースター, P.119 〈Marching round the Levee〉 〈Go in and out the Window〉) では、クロス役のサークルは村の家並みもあらわす(歌詞7参照)。「村を廻れ」に続く「窓を出入りせよ」で、円中央のものはサークルのメンバーの間をぬうように廻っていき、パートナーの前にきて跪く。この遊びは、新しいカップルとこれを祝福する一団が村の家々を廻り歩く習慣を再現したものといわれる。

歌詞7 〈Round and Round the Village〉

Round and round the village,
Round and round the village,
Round and round the village,
As you have done before.

In and out the window,
In and out the window,
In and out the window,
As you have done before.

Stand and face your lover,
Stand and face you lover,
Stand and face your lover,
As you have done before.

4. 特別の隊形をもたない対話形式のもの

これに属する鬼遊びの鬼は、求婚者ではなく、文字通りの歓迎されない鬼である。ゴムは無隊形として扱っているが、日本の「子とろ鬼」によく似た一列隊形をとるものが多い。この鬼遊びは原則として旋律をもたず、台詞だけで行われる(ゴム, 1898, P.479)。

〈Fox and Goose〉(ゴム, 1894, P.139, P.201 〈Hen and Chickens〉, ニューウェル, P.155 〈Hawk and Chickens〉) は、その典型的な遊びで、ヨーロッパ各地に分布する。鬼と母親を先頭にした子ども達の長い列が向かい合い、問答の後、鬼は最後尾のものをつかまえようとするが、母親は手を広げて子ども達を守る。じゅずつなぎの列が移動するこのゲームは、単なる追かけ鬼にはない独特のスリルがある。鬼は狐、狼、鷹などの獲物をねらう動物、対す

る餌食は雌鶏とひよこ、鶯鳥の親子、羊飼いと羊という組み合わせである。つかまったものが鬼側に移ったり、最後尾のものと鬼が交代したりして、ゲームが再開される。

〈Witch〉(ゴム, 1898, P.391, ニューウェル, P.215 〈Old Witch〉, ブルースター, P.48) は隊形を全くとらず、魔女が子供を盗むという古い迷信に因む劇遊びである。次々と子どもを連れ去られた母親が、様々な障害に会いながらも子どもを取り戻すという内容。〈Ghost at the Well〉(ゴム, 1894, P.149, ニューウェル, P.223 〈Ghost in the Celler〉) も、無隊形の鬼遊びで、母親と子ども達の一団を、井戸端の幽霊が追いかけるものである。

5. アーチ形

アーチ形のくぐり遊びには、2つの系統が考えられる。一つは、アーチの中には捕えられたものが、アーチ役の2人のどちらか一方を選択して全員が2組に分けられ、最後に双方が引張り合い(Tug of War)をするもの、もう一つは、歌の終わりにメンバーを捕えるだけのものである。前者は選択と闘争に、後者は捕獲にゲームの主眼がある。

アーチ形のゲームの大半は、この第一の闘いのタイプで、これは臣民によるリーダー選びのなごりとされる(ゴム, 1898, P.505)。アーチ役の2人は、オレンジとレモン、太陽と月、金と銀などの対立する名前をもつが(ゴム, 1898, P.25, ニューウェル, P.212 〈Open the Gates〉, ブルースター, P.140)、他のメンバーにはアーチ役の各々の名前が知らされていないために、このゲームには物当ての面白さも加わる。

メンバーを捕えるだけの第二のアーチ遊びには、〈Needle's Eye〉(〈Through the Needle Eye〉〈Threading the Needle〉ともいう。ゴム, 1898, P.228, P.289, ニューウェル, P.91, P.241, ブルースター, P.108)があり、これは捕えられたカップルがキスをする結婚ゲームで、懺悔火曜日(Shrove Tuesday Festival)を祝う風習に由来するといわれる(ゴム, 1898, P.228)。

さて、破壊された橋の再築をめぐる長い問答が展開される〈London Bridge〉(ゴム, 1894, P.333, ニューウェル, P.205, ブルースター, P.138)は、アーチ遊びの代表であろう。この〈London Bridge〉には、第一の引張り合いをするものと、第二の捕えるだけのものがあり、起源をめぐる2つの考え方がある。第一の型をとるニューウェルは、この遊びが中世信仰にある善と悪の葛藤に支配される人間の宿命をあらわすものであるとする(ニューウェル, P.205)。一方、第二の型をとるゴムは、捕えられるものは橋や城門を築く際の人柱の象徴であるとし、実際アーチ遊びに続いて、同じ歌でサークルダンスが踊られることも多い。

その他に、手をつないで半円の隊形をとり、一方の端の2人がアーチをつくり、その下を列の他の端のものからくぐりぬける遊びもあるが(ゴム, 1894, P.350 〈Long Duck〉)、この遊びは単純に体の動きを楽しむものといえよう。

6. 巻き上げ形

この遊びは、〈Eller Tree〉〈Winding up a Watch〉〈Snail Creep〉などの名があるように(ゴム, 1894, P.119, 1898, P.384 〈Winding up the Bush Faggot〉)、列の端のものを中心に、全員が手をつないで次第に蛇のように巻き上げてゆくものである。樹木信仰に因むといわれるこの遊びは、巻き上げが頂点に達すると、あたかも地の神を呼びますかのように、お互いの足を踏んだり跳び上ったりして大騒ぎをする。普通は、逆に巻き戻して終わるものが多

い。この遊びの醍醐味は、体の窮屈さから生じる愉快的な混乱であろう。

7. 日本の鬼遊び

日本のわらべうたの鬼遊びはどうであろうか。まず、列形については子もらい遊びの〈花いちもんめ〉がただ一つあるだけである。遊びのルールは欧米と同じであるが、尾原はこの〈花いちもんめ〉を、嫁とりや子とりを歌った〈たんす長持〉〈ほしやほしや〉〈すずめすずめ〉などの遊びと同系列のものと考え、さらには〈子とり鬼〉にもつながるという興味深い見解を述べている（尾原，1975，pp.138～161）。

円形では、サークルの拡大や縮小を単純に楽しむ〈ひらいたひらいた〉や、比較的完成された演劇形式をもち、追いかけて鬼に発展する〈今年のぼたん〉〈あずきたった〉などが代表的である。歌の終わりで鬼がうしろにきたものをあてる人あて鬼の〈かごめ〉（同種のものに〈坊さん坊さん〉〈かりうどさん〉がある）は、欧米の〈Muffin Man（パン売り）〉に相当するが、ゴムはこれを単純な目かくし鬼に分類している。体遊びの〈人工衛星〉（じゃんけんをして相手に近づき、足をかけて倒す）、〈いろはにこんべと〉（手をつないで互いに引張り合う）、〈そろったそろった〉（片足を互いにかからませ、他方の足で進む）などは、はじめに円陣をつくるが、あくまで遊びのきっかけにすぎない。日本のサークル遊びには、欧米に顕著なパートナー選びが全くなく、またサークルの回転そのものを楽しむ遊びが少ない。

一列隊形の対話形式の鬼遊びは、日本にも〈子とり鬼〉が古くから伝わっている。アーチ形には、最もポピュラーな関所遊びの〈通リゃんせ〉がある。くぐるものが2組に分けられた後、日本では引張り合いよりもむしろ〈地獄極楽遊び〉の方が一般的である。これは捕えられたものが、アーチ役が予めとりきめた地獄と極楽を選ぶことにより、地獄は乱暴に極楽は静かに揺すられるものである。また、列の一方の端のアーチや、サークルの中のアーチを、他の端から順にくぐりぬける単純なアーチ遊びの〈通れ通れ山伏〉（尾原，1975，P.185）もある。第五の巻き上げ形は、日本にはほとんど例がない。日本と欧米の鬼遊びの大きな相違は、求愛、結婚のゲームの有無であろう。これは、双方の恋愛や結婚に対する意識の相違に起因するものである。

参考文献

I. 和書

- 尾原昭夫 日本のわらべうた、〈室内遊戯編〉、社会思想社、1972
 尾原昭夫 日本のわらべうた、〈戸外遊戯編〉、社会思想社、1975
 小泉文夫編 わらべうたの研究、わらべうたの研究刊行会、1969
 後藤田純生 欧米わらべうた考—日本わらべうたとの比較に立って、日本児童文学別冊、日本児童文学者協会編 マザー・グースのすべて、ほるぷ教育開発研究所、1976、pp.146～157
 後藤田純生 世界のあそび歌35、音楽之友社、1975
 後藤田純生 世界のあそび歌40、音楽之友社、1981

II. 洋書

- P.G.Brewster, Children's Games and Rhymes, Arno Press, New York, 1976
 E.Fowke, Sally go round the Sun, 300 Songs and Games of Canadian Children, Double Day & Company Inc., Garden City, New York, 1969
 A.B. Gomme, The Traditional Games of England, Scotland and Ireland, vol. I, II, Dover Pub.

Inc., New York, 1964, 1st ed. vol. I, 1894, vol. II, 1898
W.W.Newell, Games and Songs of American Children, Dover Pub. Inc., New York, 1963, 1st ed.
1883